

甲状腺外科草子 126

古文復習：新古今の夏と冬

杉野 圭三

新古今和歌集の歌の中で「夏」と「冬」は「春」「秋」に比較すると地味である。

夏歌

春過ぎて夏来にけらし白たへの衣干すてふ
天の香具山 (175 持統天皇)

鳴く声をえやは忍ばぬほととぎす初卯の花
の蔭に隠れて (190 柿本人麻呂)

聞かてただ寝なましものをほととぎすな
かなかりや夜はの一声 (203, 相模)

(聞かずに寝ればよかった、夜半ほととぎすの
声中途半端に聞き、もっと聞きたい思いがつのる)



ホトトギス



卯の花 (ウツギ)

夏の歌には「ホトトギス」が歌われることが
多いが、現代では見かけることは稀となった。
なべて世のうきに流るるあやめ草けふまで
かかる根はいかがが見る (223, 上東門院小少将)

紫式部に贈った世の憂さを嘆く歌、返しあり。
いかばかり田子の裳裾もそほつらむ雲間も
見えぬ頃のさみだれ (227, 伊勢大輔)

田植えの早乙女と五月雨の情景かな。



あやめ? カキツバタ? 菖蒲? 鑑別困難!
帰り来ぬ昔を今と思ひ寝の夢の枕にほふ
たちばな (240, 式子内親王)

流石の女流歌人ならではの感性かな!

よられつる野もせの草のかげろひて涼しく
曇る夕立の空 (263, 西行法師)

夏の名歌は他の季節に比べて少ないように感じる。

冬歌

おきあかす秋の別れの袖の露霜こそ結べ冬
や来ぬらむ (551 藤原俊成)

冬を浅みまだき時雨と思ひしを絶えざりけ
りな老いの涙も (578 清原元輔)

数ふれば年の残りもなかりけり老いぬるば
かりかなしきはなし (702 和泉式部)



雪の朝の椿と南天

雪の朝、後徳大寺左大臣もとにつかはしける
けふはもし君もや問ふとながむれどまだ跡
もなき庭の雪かな (664 俊成女)

返し

今ぞ聞く心は跡もなかりけり雪かき分けて
思ひやれども (665 後徳大寺左大臣)

「貴方が来るかと思っていたのに足跡も無
い」という歌に対し、後徳大寺左大臣(藤原実定)
は「雪をかきわけて貴女のことを思っていた
のに」と、軽妙なやりとりで返している。

ふればかく憂さのみまさる世を知らで荒れ
たる庭につもる初雪 (661 紫式部)

駒とめて袖うちはらふ蔭もなし佐野のわたり
の雪の夕暮れ (671 藤原定家)



富士山



蝦夷富士 (羊蹄山)

田子の浦にうち出でて見れば白妙の富士の
高嶺に雪は降りつつ (675 赤人)

けふごとにけふやかざりと惜しめどもまた
も今年に逢ひにけるかな (706, 藤原俊成)

新古今冬歌の最後を締めるのは、やはり重鎮
の藤原俊成であった。

参考資料: Wikipedia

(一甲状腺外科医の徒然なる随想)

2025年1月17日